

M. アーノルドの詩における Serenity と Severity の問題

東 城 真 造

The Problems of "Serenity" and "Severity" in the Poems of Matthew Arnold

Shinzo Tojo

序 の 章

Matthew Arnold (1822—1888) の文学生活は、一般に二つに分けられる。前半が詩人として、後半が批評家としてである。詩人としての彼の活動は、批評家としてのそれに及ばないことは、世間が認めているところである。更に同時代の詩人、Tennyson や Browning よりも、量において劣るし、また彼らほど名声を得ているとも思われない。むしろ詩人としての Arnold は、minor poet であったと言えよう。

しかしながら、Arnold は自分の詩に強い自負を持っていた。1869年の6月5日に、母へ出した手紙で次のように言っている。

It might be fairly urged that I have less poetical sentiment than Tennyson, and less intellectual vigour and abundance than Browning: yet, because I have perhaps more of a fusion of the two than either of them, and have more regularly applied that fusion to the main line of modern development, I am likely enough to have my turn⁽¹⁾

つまり Tennyson ほどの詩的情緒もないし、Browning ほどの知的力強さも豊かさもないが、その両者を融合したものは、彼ら二人のどちらよりも多くもっている。そういうものを、現代の発展に正しく適用したので、自分の詩も名声をはくす時代が来るだろう……と言っているのである。

このような自信に満ちた彼の詩を、我々が読み、最も強く感ずることは、「精神が自己とかわす対話」(the dialogue of the mind with itself)⁽²⁾ によって create される、人間や人生の問題が、常に彼のテーマとなっていることである。つまり彼のいう「詩は根底において人生の批評である」(poetry is at bottom a criticism of life)⁽³⁾ という思想、信念が強く感じられるのである。

彼は、当時の物質的繁栄を謳歌した Victoria 朝社会に対して、真っ向から挑み、宗教的、人間的なものを、自己の魂の奥深くに求め続けた。ある時は、古代ギリシヤの道徳的精神的なものの中へ、またある時は、大自然の静寂の中へと求め、厳しく内省し瞑想した。そして深く煩悶した。

これは或る面では、そのまま Arnold の思想につながる。よく彼について言われる言葉、“ambivalence” (反対感情共存) という言葉が、それを象徴している。例えば、Hebraism と Hellenism 的なもの、Romanticism と Classicism 的なもの、更に Arnold 自身の言葉 *Culture and Anarchy* の中で〈美と知〉の意味に用いられた Sweetness と Light, また *Maurice de Guerin* の中で述べている、詩の解釈に必要なものとしての Natural magic と Moral profundity, それに先に引用した Tennyson と Browning が代表するものなど、こういう相反するものの調和、統一を目指し、「人生を着実に見、しかも全体を見る」(who saw life steadily, and saw it whole⁽⁴⁾) 人間像を求めて、Arnold は深く煩悶したのである。そして概して、stoic な諦観、忍従の人生を吐露したと言えよう。

以上のような観点から、私も私なりに、彼の ambivalence な感情を、“Serenity” と “Severity” な面からとらえ、Arnold の詩を考えてみたい。そして特に彼の煩悶と思考の process を通して、その詩想 (poetic thought) を眺めてみたいと思う。

第 I 章

Arnold の詩の常なるテーマであった、人間や人生の問題を考えるにあたって、彼の自然観をも考えてみることは、一つの方法であり、彼の詩を理解しようとする時、必要欠くべからざる問題である。つまり〈自然と人間〉これは、一詩人なり、一作家なりを研究する時、昔からよく取り扱われてきたし、これからも永遠に問題とされるであろうテーマであるが、ここでもまず、Arnold の自然観と人間観を、はっきりとさせておきたい。

これについては、G. Robert Stange が *The Poet as Humanist* の中で、適確にまとめているので、それを引用してみよう。

For Arnold—and this is the key to the matter—there were two external natures matched by two forms of self-consciousness in man. The lower form is the living, changing nature around us; the higher is the universal cosmic process, the general life in which change assumes permanence. In man's inner life Arnold distinguishes (always by implication) between a lower form of self-involvement, that condition in which we are subject to the senses, to the change and fretfulness of the everyday world, to a potentially morbid self-consciousness which produces anguish rather than joy; and a higher form of self-awareness which involves a sinking into the depths of the self and an achieving of unity with the cosmic order.⁽⁵⁾

と以上のように述べている。つまり自然も人間も二元論的な存在として把握されているが、これは当を得ていると思う。

元来、Arnold の詩には、〈旅〉というか青春の〈彷徨〉というか、社会の喧噪から離れ、自然の中をさすらう内に、思想的にも発展していく詩が多い。これは今述べた自然と人間の四つの次元（または世界）の wandering であると言えよう。もう少し説明を加えるならば、感覚的なもの、日常世間の変化や不満、ともすれば喜びよりも苦悩を引き起す不健全な自意識、そういったものに支配される自己煩悶の状態、つまり一種の表面的な severity な人間社会（人間の lower form）から、安らぎとなる救いを求めて、我々を取り巻く生命をもって変化している四季とりどりの、むしろ serenity な自然界（自然の lower form）へと向かう。しかしそこで、自然の内側にひそむ、広大無辺の永久に変わることのない宇宙の作用、その生命、言い換えれば severity な整然とした大自然（自然の higher form）を知り、再び自分というものを見つめる。そして自己の魂の深奥、Arnold のいう “genuine-self” あるいは “hidden-self”⁽⁶⁾ の中に沈潜し、宇宙の秩序をもった統一性の達成を目指す自我意識の中で、倫理的な価値とか精神的な洞察といったような、いわば serenity な人間的境地（人間の higher form）に達するのである。これが Arnold の詩のめざす究極的な自然と人間の全体像である。そしてこの精神的な wandering が、詩の内面的な story となり plot となるのである。

第 II 章

ここで二、三の詩を眺めてみたい。まず第一に、Arnold の最も代表的な詩の一つである *Resignation* を取りあげてみよう。

この詩は、逆境にある姉 Fausta を慰め励ますために、10年前に旅した山野を、再び逍遙し、川に沿って下りながら、speaker である詩人が、人生に処する resignation を説くのである。現状に耐え忍び、未来を、希望を wait する Arnold の哲学、言いかえれば、自然観、人生観を説くものである。

冒頭の2行

To die be given us, or attain!

Fierce work it were, to do again.

我々に死を与えよ、さもなくば達成させよ！

たとえ再び行ることが、残酷な業^{わざ}であろうとも。

(*Resignation*, 11.1-2.)

これは、読者である我々の身がひきしまる思いがする程に、腐敗していく現実生活に対する、詩人の真摯な生き方を願う厳しい態度がうかがわれる。逆境にある姉、同時に煩悶する詩人は、この苦しみの生活から、⁽⁷⁾ “noisy town” によって象徴される機械文明の現代社会から、大

自然の中へと、慰安を求めて旅をする。10年前にも訪れた所、そこは良き過去の回想の場でもある。

Once more we tread this self-same road,
 Fausta, which ten years since we trod;

 Here sit we, and again unroll,
 Though slowly, the familiar whole,
 The solemn wastes of heathy hill
 Sleep in the July sunshine still;
 The self-same shadows now, as then,
 Play through this grassy upland glen;
 The loose dark stones on the green way
 Lie strewn, it seems, where then they lay;
 On this mild bank above the stream,
 (You crush them!) the blue gentians gleam.
 Still this wild brook, the rushes cool,
 The sailing foam, the shining pool!
 These are not changed. . . .

(*Ibid.*, 11. 86-87; 94-106.)

^{いとしえ}昔と変らぬ全く同じ日影が、今も草深い高地の谷間に揺れ……この河の上流のなめらかな堤には、空色のりんどうの花が輝いている……。<りんどうの花>によって象徴される平穏な自然へと主人公たちは向かうのである。もしくは過去の回想へと向かうのである。Arnoldにとって、過去は、苦境の時にしばしば描かれる、以前に接したことのある美しい自然なのである。詩人と Fausta はここで、過ぎ来し10年の歩みを考え、「騒々しい現代社会の亡霊」(Ghosts of that boisterous company)⁽⁸⁾となった自分たちを痛感する。そして10年1日が如くに、同じ生活をするジプシーたちの生活や、日没から夜明けへと移る自然のただずまいの中に、一種の resignation を見出し、Fausta に語るのである。

. . . the mute turf we tread,
 The solemn hills around us spread,
 This stream which falls incessantly,
 The strange-scrawl'd rocks, the lonely sky,
 If I might lend their life a voice,
 Seem to bear rather than rejoice.

(*Ibid.*, 11. 265-270.)

喜ぶというよりもむしろ耐え忍んでいるように思える……という自然は、すでに感覚的な自然ではなく、倫理的な目をもって見た自然である。自然に価値を見出した詩人は、更に我々人

間の心に目を向け、倫理的な価値を見出そうとする。そして我々人間の到達したい境地を、Fausta に語って聞かせる。

Lean'd on his gate, he gazes--tears
 Are in his eyes, and in his ears
 The murmur of a thousand years.
 Before him he sees life unroll,
 A placid and continuous whole--
 That general life, which does not cease,
 Whose secret is not joy, but peace;
 That life, whose dumb wish is not miss'd
 If birth proceeds if things subsist;
 The life of plants, and stones, and rain,
 The life he craves--if not in vain
 Fate gave, what chance shall not control,
 His sad lucidity of soul.

(*Ibid.*, 11. 186-198.)

詩人は、普遍の生命……それは喜びではなく平和であり……人間の真剣な魂の輝きである……と言っている。そしてこの言葉の中に述べられる、人間の生命の真の姿に、あるいは静かな悟りの状態に、未来に希望を見出す境地に、到達することを願うのである。そしてこの *wandering* の内面的な心像風景と化する川は、現代社会の街を下って、未来の海へと続くのである。これが *Resignation* という詩の、簡単な *summary* であり、Arnold の詩の一つの *pattern* である。

野を横切ってとうとうと流れ、遥かに海へとそそぐ大河のイメージでもって、未来に希望をたくし、象徴的にこの境地を述べているのは、何と言っても *Sohrab and Rustum* の最後の描写であろう。

Oxus, forgetting the bright speed he had
 In his high mountain-cradle in Pamere,
 A foil'd circuitous wanderer--till at last
 The long'd-for dash of waves is heard, and wide
 His luminous home of waters opens, bright
 And tranquil, from whose floor the new-bathed stars
 Emerge, and shine upon the Aral Sea.

(*Sohrab and Rustum*, 11. 886-892.)

第 III 章

次に Arnold の思想を総べて包含しているとも言える、彼の最大の詩 *Empedocles on Etna*

について述べてみよう。

哲学者 Empedocles とその友達である医者 Pausanias, それに若い harp-player である Callicles の 3人が登場し、場面は Sicily 島の Etna 山という劇的構成である。更にそれは 2 幕から成り立っている。Empedocles は、かつては権力があつたが、しかし今は落ちぶれた流浪の身である。彼は Etna 山に来て、自分の過去を振り返り、真の人間はどうあるべきかを、同伴している Pausanias に語る。それから独りで頂上に登り、そこで死後の魂について黙想し、その後、燃えたぎる噴火口に身を投じて死ぬ。一方 Callicles は、山の中腹に身を隠し、神を讃美し、自然の美や喜びを歌うのである。

Arnold 自身の経験の投影として、*Empedocles on Etna* は、象徴的なものを多分にもっている。彼の ambivalence な感情は、この 3人の登場人物に具体化され、Etna 山のふもとから頂上への旅も、spiritual なもので、朝から夜への時の経過も、youth から maturity への意味をもっているのである。

ここでもう少し深く見てみよう。Act I, Scene i は、Callicles による、静かな山の朝の描写から始まり、Callicles と Pausanias との間でかわされる Empedocles の描写である。Empedocles はすでに「ふくれあがる現代の悪」(the swelling evil of this time)⁽⁹⁾によって押しやられ、疲れた追放者として描かれる。これに関連して、1953 年版の詩集の Preface の中で、Arnold は次のように述べている。

I intended to delineate the feeling of one of the last of the Greek religious philosophers, . . . living on into a time when the habits of Greek thought and feeling had begun fast to change, character to dwindle, the influence of the Sophists to prevail.⁽¹⁰⁾

つまり、ギリシャの思想や感情の気質が変容し、その特質は重要さを失い、Sophist たちの影響力がすでに広まっていた時代に生き続けた、ギリシャの宗教哲学者の最後の一人の気持ちについて書きたかったと述べているが、これは詩における Empedocles の心情と同じである。また Arnold 自身も感じたもので、相容れることの出来なかった Victoria 朝の時代精神に対する、苦悩と焦躁の現われでもある。そこに彼は mind の重要性を見出している。こういふ setting のもとに、主人公が自然に向かうのは、*Resignation* の場合と同じである。

(Act I) Scene ii は、Etna 山の窟である。Scene i でも同様であるが、Callicles は常に美しい自然を歌う。あるいはまた遠い昔の神話について歌うのである。

. . . the beam

Of noon is broken there by chestnut-boughs
Down its steep verdant sides; the air
Is freshen'd by the leaping stream, which throws
Eternal showers of spray on the moss'd roots

Of trees, and veins of turf, and long dark shoots
 Of ivy-plants, and fragrant hanging bells
 Of hyacinths, and on late anemonies,
 That muffle its wet banks; but glade,
 And stream, and sward, and chestnut-trees,
 End here; Etna beyond, in the broad glare
 Of the hot noon, without a shade,
 Slope behind slope, up to the peak, lies bare;
 The peak, round which the white clouds play.

(*Empedocles on Etna*, I, ii, 43-56.)

厩の光のもれる茂みの下に、川瀬の水がしぶきをあげ、釣鐘状のヒアシンスや遅咲きのアネモネの花が咲いている。しかし Etna 山の頂上近くには、草木はない。空には白い雲が浮んでいる……と、Callicles は harp をひきながら歌う。

やがて Empedocles は Pausanias に語り始めるが、Callicles とは違った心の眼で自然をとらえている。

Nature, with equal mind,
 Sees all her sons at play;
 Sees man control the wind,
 The wind sweep man away;
 Allows the proudly-riding and the foundering bark.

(*Ibid.*, 257-261.)

この stanza は、よく知られているマタイ伝の 5 章 45 節「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる……⁽¹¹⁾」という一節を思い出させる。

Empedocles にとっては、人間は自然の一部にすぎなく、元来弱くもろいものである。更に自然の中には morality を見出していない。それ故、Empedocles は「自分の魂の中に沈潜せよ」(Sink in thyself!)⁽¹²⁾ と語り、そこに道徳性を求め、人間のあるべき姿⁽¹³⁾、行動の重要性⁽¹⁴⁾、中庸の精神⁽¹⁵⁾、自由の限界を認めた Stoic な忍従等⁽¹⁶⁾について説く。

最後に自分は「明日か、あるいは世界の革命されるいつの日か」(to-morrow or some other day, / In the sure revolutions of the world)⁽¹⁷⁾ に帰ると言って、Pausanias だけを街へ降りて行かせる。これは象徴的なところである。

ここで人物について少し見てみよう。

Pausanias——彼は、現代の騒音の街に降りていくことによって象徴されるように、Stoic な道徳でもって、この世をうまく生きていく賢者であり、Arnold the moralist であると言えよう。Callicles——彼は、美しい自然や遠い昔の神話を歌い、山の中腹にいて姿を見せない。

しかし彼の声は時折り Empedocles の耳に入る。この象徴は、Arnold が完全には断ちきることの出来なかった Romanticism への憧れで、Arnold the poet であり、或る面では、romantic poet と言えよう。Empedocles——彼は、自分の時代がすでに終わった最後の Greek philosopher で、Victoria 時代の Arnold の立場と同じである。良き過去に生まれ、その時代にノスタルジアを抱く Arnold the romantic と言えよう。それ故、ここでは簡単に扱われる問題ではないが、Empedocles の自殺は、Romanticism を断ち切る決意とも解されよう。また Arnold the man の面でもある。

Act II は、星が輝き始めた夕べに、Empedocles が現代の “envious, miserable age”⁽¹⁸⁾ からひとりで火口に近づき、魂について沈思する。しかし時折り Callicles の歌が聞え、Empedocles は昔の喜びを思い起す。

The smallest thing could give us pleasure then--
 The sports of the country-people,
 A flute-note from the woods,
 Sunset over the sea;
 Seed-time and harvest,
 The reapers in the corn,
 The vinedresser in his vineyard,
 The village-girl at her wheel.

(Ibid., II, 250-257.)

森から聞えて来る笛の音でさえ、海に沈む夕陽でさえ、どんな小さなことでさえも、昔は喜びを感じた。しかしこのような回想の中には、魂の composure は得られない。やがて星が光度を増し、Empedocles は自分の melancholy を星に具象化するが、しかしながら、この時自然の永遠性を見出すのである。

... ye stars! there is no death with you,
 No languor, no decay! languor and death,
 They are with me, not you! ye are alive--
 Ye, and the pure dark ether where ye ride
 Brilliant above me!

(Ibid., II, 301-305.)

自然に比べ人間の無常というか、はかなさを感じる。そして人間の mind とか thought について考え、Resignation の中で述べられた「普遍の生命」(general life)⁽¹⁹⁾ である “All” つまり “the life of life”⁽²⁰⁾ の追求に向かう。そして人と “All” との完全な融合を Empedocles⁽²¹⁾ は望むのである。それには「真剣な試練」(sad probation)⁽²²⁾ に耐えて行かねばならないし、またその努力が人生の大きな希望となり、力となるのだ……と、Empedocles は独白する。これ

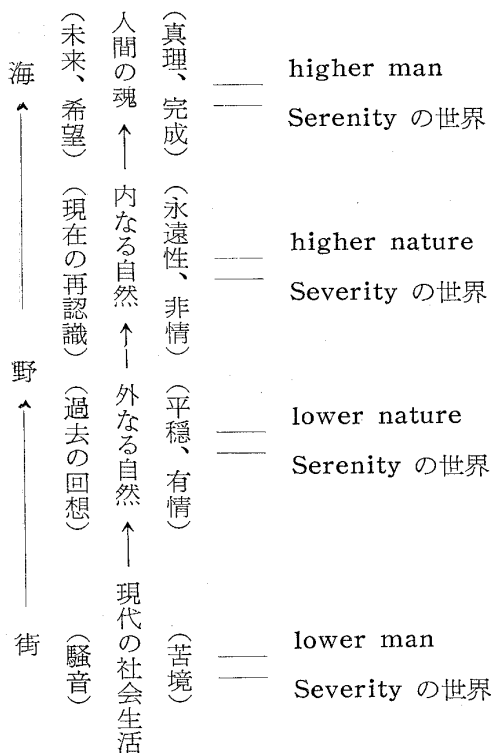
が *Empedocles on Etna* の簡単な Summary である。

第 IV 章

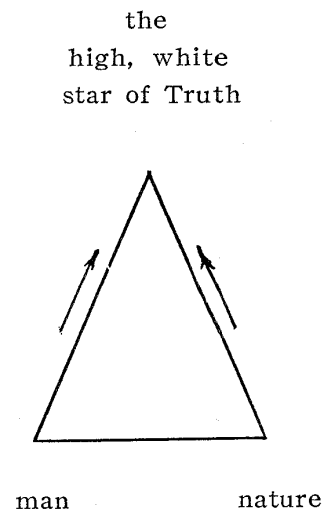
以上 *Resignation* と *Empedocles on Etna* の二つの詩を見てきたが、それぞれの主人公の自然と人間についての思索に於て、同じ pattern を見出すことが出来るのである。つまり自然界と人間界をさまよう symbolize された wandering により、serenity と severity の交錯により、主人公が真なる自己を発見する思考過程を知ることが出来る。これを一つの図式(図1)にしてみよう。

Arnold に於ける “wandering” の意味⁽²³⁾

(図1)



(図2)



この思考過程は、他の多くの詩、例えば *The Future*, *Saint Brandan*, *Sohrab and Rustum*, *A Summer Night*, *Self-Dependence* 等にも見られる。他に学問に疲れ、自然に慰安を求めてさまよう *Scholar Gipsy*, *The Buried Life* 等にも同じことが言える。そして自分の生きている社会に不満を抱き、*Memorial Verses* の中では「懷疑と論争と煩悶と恐怖のこの鉄の時代」(this iron time / Of doubt, disputes, distractions, fears)⁽²⁴⁾ と言っている。しかしやがて外なるおだやかな自然から内なる自然の偉大性を知り、自然から学ぼうとする。「自然よ、一つの教訓を汝から学ばしめよ」(One lesson, Nature, let me learn of thee)⁽²⁵⁾ と呼びかけるが、所詮人間第一主義の Arnold には、自然から倫理的なものは得ら

れない。「知れ／自然が持っているものをすべて人間は持っているが、しかしそれ以上のものも持っているのだ／そしてその中には、善を求める希望がある」と *In Harmony with Nature* の中では叫んでいる。つまり自然から一時的な tranquillity は得られるが、*“Calm's not life's crown, though calm is well.”*⁽²⁷⁾ なのである。真の人間として生きていくには、自分の魂に向かわねばならない。「神の如き力の種はまだ我々の中に存し／もし意志があれば、我々は神になれ、詩人になれ、聖人になれ、英雄になれる」⁽²⁸⁾ のである。更に「自分自身であることを解け。自分自身を見つけ出す人は／自分の不幸を取り去るということを知れ。」⁽²⁹⁾ と *Self-Dependence* の最後では言っている。

このような思想の essence を、*The Youth of Man* という詩は、実に印象的にうたいあげている。この詩に少し触れてみよう。時折り犬の吠え声も聞える、静かな春の夕べに、花の香もただより豪華な邸宅の庭で、一組の老夫婦が、遙か遠く、夕もやにつつまれた平野の中を、海の方へと流れている川を見やりながら、過ぎ来し方を涙ながらにふり返るのである。昔日に彼らは同じこの庭に立って、

We are young, and the world is ours;
Man, man is the king of the world!

...

Nature is nothing; her charm
Lives in our eyes which can paint,
Lives in our hearts which can feel.

(*The Youth of Man*, 11. 26-27; 35-37.)

と豪語したのであるが、年を経るにつれて、永遠の内なる自然を知り、一方自分たちのむなしさを知るのである。

... the mists of delusion,
And the scales of habit,
Fall away from their eyes;
And they see, for a moment,
Stretching out, like the desert
In its weary, unprofitable length,
Their faded, ignoble lives.

(*Ibid.*, 11. 105-111.)

若さにまかせて、自然の魅力は、ものを描くことの出来る我々の眼の中のみ生きているのだと言った、あの眼から、妄想の霧や、習慣の靄が落ちて、初めて人間の無常を知り、若い時の傲慢さを深く悔いるのである。そして最後の stanza で、Arnold 自身が我々に呼びかける。否、祈願し、叫んでいるのである。

Sink, O youth, in thy soul!
 Yearn to the greatness of Nature;
 Rally the good in the depths of thyself!

おお若者よ、汝の魂の中へ沈潜せよ！

自然の偉大さに憧れよ。

汝自身の魂の奥底で、善なるものをもり返せ！

(*Ibid.*, 11 116-118.)

つまり究極的には、自己の魂に沈潜しなければならないが、それは自然の偉大さを知ることによって達成されるのである。そして統一と調和の中にある真理は、内なる自然と真の自己との一致に於て見出されるのである。それ故、自然を知ることが、人間が完成されるに不可欠なまわり道でもあると言えよう。

第 V 章

G. Robert Stange の Arnold の〈自然と人間〉に関する一節を、この小論の初めに引用したが、彼はそれについて、更に次のようにまとめている。

Arnold's view could be diagrammed as a triangle, with the base representing the lower, phenomenological level on which man and nature are distinct; at this level man can find charm, comfort, a certain solace in the natural world, but not ethical value or spiritual insight; at a higher level (the apex), however, man and nature are one; in his deepest being he is a part of cosmic nature and he may best achieve awareness of this permanent life by clearing and purifying his own vision.⁽³⁰⁾

Arnold の観方は一つの三角形で図示されることが出来る。つまり三角形の低辺は、人間と自然が全く別の存在であり、現象上の低い水準を示す。そこでは、人間が自然界に魅力、安楽、ある種の慰安などを見出すことが出来るが、倫理的な価値とか精神的な洞察は見出せない。しかしながら高い水準（三角形の頂点）では、人間と自然が一つである。人間の心の一番深いところでは、広大無辺の自然の一部となり、自分自身の理想（向上心）を明確にし純化することによって、この永遠の生命を最もよく認識することが出来る……と述べているが、この三角形の頂点こそ、Arnold が求めつづけたもの、さまよい続けた目的地、つまり“the high, white star of Truth”⁽³¹⁾ であろう。(p. 65の図2)

結 の 章

以上みてきたように、Arnold の詩は、ほとんど対話の調子で、普通の観察から ambivalence

な自然と人間, Serenity と Severity の, ら線状の思考過程を得て, 徐々に高められて発展していくので, 華やかなバラ色の太陽のようなものではなく, 整然として夜空に輝く星の如く, 一種の深い道徳的精神的な心の高揚と慰藉を与えてくれるのである。これが彼の詩の重厚さである。Arnold の文学的喜びは, 感覚的なものではなく, 静かな悟りのようなものであると言えよう。

最後になったが, 100年以上も前の詩人, Arnold が, *Scholar-Gipsy* の中で, 当時の物質的繁栄に満された俗物根性(Philistinism)の社会を, 「現代生活の奇怪な病い」(this strange disease of modern life)⁽³²⁾と嘆いたことはあまりにも有名であるが, この one line は, 現代の我々にも通じ, 公害によって, 人間に, 魚に, 野菜に, 奇病や奇型が発生している現代, 非常に重みをもった言葉であると思う。easy-going な生活の陰で, 精神的な読み物が多く求められている今日, 何か Arnold の, 自分の詩に対する自負心の正当性を, 私は感ずるのである。同時に Arnold の批評眼のするどさが, すでに彼の詩にも見出される思いがする。

Notes

1. George W.E. Russell (ed.), *Letters of Matthew Arnold*, 2 vols. (Now Yrok, 1895), II, p.9.
2. C.B. Tinker and H.F. Lowry (ed.), "Preface of 1853," *Arnold Poetical Works*, Oxford University Press (London, 1966), p.xvii.
なお詩の引用は以後すべてこの Oxford 版による。
3. Noel Annan (ed.), "Wordsworth," *Matthew Arnold Selected Essays*, Oxford University Press (London, 1964), p.129.
4. *To a Friend*, 1. 12.
5. G. Robert Stange, *The Poet as Humanist*, Princeton University Press (Princeton, 1967), pp.139-140.
6. *The Buried Life*, 11. 36;65.
7. *Resignation*, 11. 77;93.
8. *Ibid.*, 1.89.
9. *Empedocles on Etna*, I, i, 1. 113.
10. "Preface of 1853," *Arnold Poetical Works*, p.xvii.
11. *Matthew* 5:45. "That ye may be the children of your Father which is in heaven: for he maketh his sun to rise on the evil and on the good, and sendeth rain on the just and on the unjust."
12. *Empedocles on Etna*, I, ii, 1. 146.
13. *Ibid.*, I, ii, 1. 136. "Be neither saint nor sophist led, but be a man!"
14. *Ibid.*, I, ii, 1. 241. "Our own acts, for good or ill, are mightier powers."
15. *Ibid.*, I, ii, 1. 386. "Make us, not fly to dreams, but moderate desire."
16. *Ibid.*, I, ii, 11. 422-423. "Life still / Leaves human effort scope."
17. *Ibid.*, I, ii, 11. 471-472.
18. *Ibid.*, II, 1. 107.

19. *Resignation*, 11. 191; 252.
20. *Empedocles on Etna*, II, 1. 375.
21. *Ibid.*, II, 11. 371-372. "Our own only true, deep-buried selves, / Being one with which we are one with the whole world."
22. *Ibid.*, II, 1. 368.
23. Wandering の過程に於て, <外なる自然→現代の社会生活→内なる自然→人間の魂>という経過をたどる説もある。しかしそれは, 詩の表現, 描写の面であって, 思考の流れとしては, むしろ私の示したこの図式の順序であり, <内なる自然>に向う時に<現在の再認識>として, <街>の描写が入って来るのである。また参考に次の一節をあげておく。
William A. Madden, *A Study of the Aesthetic Temperament in Victorian England*, Indiana University Press, (London, 1967) "In the Arnoldian pattern these longings are related especially to the yearning for fulfillment in action and pleasure, to life as lived in a modern city in a 'plain,' between the secluded country of childhood and the distant sea of maturity and the future." (pp. 77-78.)
24. *Memorial Verses*, 11. 43-44.
25. *Quiet Work*, 1. 1.
26. *In Harmony with Nature*, 11. 5-6. "Know, man hath all which Nature hath, but more / and in that more lie his hopes of good."
27. *Youth and Calm*, 1. 23.
28. *Written in Emerson's Essays*, 11. 12-13. "The seeds of godlike power are in us still; / Gods are we, bards, saints, heroes, if we will!"
29. *Self-Dependence*, 11. 31-32. "Resolve to be thyself; and know that he, / who finds himself, looses his misery."
30. G. Robert Stange, *The Poet as Humanist*, p. 140.
31. *Stanzas from the Grande Chartreuse*, 1. 69.
32. *The Scholar-Gipsy*, 1. 203.

(この原稿は第23回日本英文学会中国四国支部大会で発表したものに手を加えたものである。)